うがたれたキズ

紅月　時夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
うがたれたキズ

【Ｎコード】
Ｎ０６５９Ｈ

【作者名】
紅月　時夢

【あらすじ】
北の大空洞へと向かう前、ある宿の一室。全てを思い出したクラウドが見た夢は……。

その日はなぜか中々寝付けなく、夜遅くまでベッドの中で寝返りをうっていた。
同室でヴィンセントが眠っているため、暇つぶしに、と本を読むことも出来ない。棺桶で眠っていたくらいだから少しの音では起きないだろうが、おそらく光には敏感だろうと見当をつけていた。

「…眠れない」

こんな夜には決まって月を見上げる。そうしていると眠くなるからだ。
そして今日もやはり月を見上げることにし、窓際へと足音を立てないようにそっと向かった。
見上げれば満天の星空。
闇夜の三日月は美しく、星とともに輝いている。
ミッドガルでいれば見ることは叶わなかっただろう空だ。
しばらくすると襲われた眠気にベッドへ入る。
隣のベッドには規則正しい寝息を立てて眠るヴィンセントの姿。無事に起こさずにすんだようで安心する。
そしてそのまま眠りについた。

目を開けると、回りは白い世界だった。
“ここは……”
見覚えのない景色に首をかしげるも、やはり見覚えはない。
取り敢えず歩いていけば景色は一転した。
そこは雨の降る小高い丘。
見覚えのある景色に瞠目した。
まだどこか虚ろな目の自分と、赤く染まった親友の姿。
雨に打たれる二人は、まさに自分の記憶そのもの。

『お前が……俺の、生きた証』

親友の言葉が耳に届く。
最後の彼の言葉は生きろとの一言だった。
その直後に響く自分の、胸を突くような叫びは耳を塞いでも消えなかった。
固く閉じていた目。
何時の間にやら聞こえなくなっていた叫びにその目を開ける。
そこはまた白い世界だった。
ふらつきながら歩いていけば景色はまた一転した。
そして目の前に現われたのは、大切な仲間。
つい先日、命を奪われた仲間。
祈りを捧げる彼女は神秘的で、額には所々汗が滲んでいた。

“……エアリス”

呟いても届かない声。
わかっていた。これは記憶なのだと。
しばらくして顔を上げたエアリスの後ろに現れる過去の自分。
ホッとしている自分がそこにいるが、それ以上来るなと今強く願っていた。
惨劇を、見たくなかった。
でもそれは叶わない。
剣を振り下ろそうとする自分に仲間たちが呼び掛ける。その声に我に返るも、直後にセフィロスの刀を受けて崩れたエアリス。

祭壇に散る血。
呆然とする自分と仲間たち。
響くセフィロスの声。

『お前は……人形だ』

思わずその場に膝をついた。

“……ッ！”

忘れたかったその言葉。
脳裏でリプレイされ続けるその言葉にずっと蝕まれてきた。
震える体を両腕でしっかりと抱き締め、前を見た。流れていく光景

は過ぎ去った過去のこと。決して変わることなどない。

『お前は人形…』

“ッ？！”

合うはずのない視線がセフィロスと絡む。
そこにいるのは過去の、記憶の中のセフィロスのはずなのに、間違いなく自分を見ていた。

『こうして記憶を繰り返すのは忘れないためか？それとも懺悔のつもりか？』

自分に向かって言葉を放ち、歩いてくるセフィロスから目を離せなかった。

『なぁ、クラウド？』

“ッ……！”

その声も存在感も、まさしくセフィロスそのもの。あまりの現状にめまいさえ感じた。

“ど……して…”

なぜセフィロスがここにいる。なぜここに本人が？
思考はぐるぐると空回りをし続けた。

『お前は私の人形だ。それ以上でも、それ以下でもない。そんなお

前の中に現れるなど容易いこと』

そう言って妖しく笑うセフィロスは目前で止まり、見下ろした。

『お前が求めるものは何だ？許しか？償いか？だが、誰もお前にそんなものを与えはしない』

“……！”

わからないことだと言いたくとも言葉は出ずに、セフィロスの台詞が胸に突き刺さる。深くうがたれたそれは傷をまた深く抉った。

『私はお前を憎しみ、そして怒りで染め上げよう。その負の感情を持って私を追い掛けるがいい』

“ま、待て…”

手を伸ばすもセフィロスは消え、空を切った手は地に落ちた。

“セフィロス！”

「セフィロスッ！」

そこには見慣れない黒く塗り潰された天井と、その天井へと伸ばされた己の手が目に映った。
今いるのが泊まっている宿だと思い出して大きく息をついた。
どうしてもまた眠る気にはなれなくて体を起こす。

「クラウド…」

突如名を呼ばれて肩がビクリと揺れる。
隣を見ればヴィンセントが起きていた。

「ヴィン、セント」

起きていたのかと呟けば彼は首を縦に振った。

「お前の苦しげな声が聞こえて目が覚めた。起こそうと思ったのが、お前が起きたからその必要がなくなっただけだ」

そう言ったヴィンセントの言葉に、すべてを見られていたのかと悟る。

「すまない。起こしたな…」
「いや、いい。私もあまり寝付けなかったからな。それより、何かしら夢でも見たのか？かなり苦しそうだったが」

自分が眠る前には寝ていたヴィンセント。気を使ったのかはわからないが、その言葉は嘘だろう。
ただ、ヴィンセントの言葉に思い出された夢はあまりにもリアルだ

った。声も、感じた思いも、あの存在感もはっきりと思い出せる。肌に染み付いていた。

「夢……とは、少し違うのかもしれないな」

ポツリと零れた呟きは小さく、力ないものだった。

「クラウド？」

「まだ、不安になる。俺の中にジェノバ細胞がある限りあいつからは、セフィロスからは決して逃げられないと。俺は…誰なんだと、怖くなるんだ」

静かに聞くヴィンセントからは何も読み取れず、呆れられたかと思っていた。

ヴィンセントは不意にベッドから立ち上がると隣に立ち、その手を伸ばした。

「？」

ボンヤリとその手を追えば肩の上に置かれて、そのまま力強く捕まれた。

「ヴィンセント？」

「お前はお前だ。クラウド・ストライフ。私を闇の中から出した男。この旅へと私を導き、セフィロスを倒してすべてを終わらせるために進んでいる。それでは少ないか？」

彼の言いたいことはよくわかった。今思い、行動しているのは自分の意志だということを示してくれている。

言葉少ないヴィンセントだが、その言葉には余計なことはなく、必

要な、今欲しい言葉が入っていた。

「ありがとう、ヴィンセント」

そう言えばヴィンセントはフッと笑う。

「意志を貫き通せ。私が言うのもなんだが、過去に囚われるな。セフィロス相手に過去に向いていては終わらない」

それは忠告であり、戒めであった。
過去を向いてはならないというのは一番思わなければならないこと。
すべてが終わるまで、感傷に浸ることが許されないのはみな同じ。

「そうだな」

弛んだ口元を見てヴィンセントは微笑む。
温かなその表情は夢での冷たさをなくしてくれるようだった。
しかし、それでも消えはしない。
セフィロスに言われ、深く胸にうがたれた言葉は消えなかった。
冷たい槍のような言葉は消えずに残り、疼いてその存在を主張していた。

end

（後書き）

初投稿した小説がこんなにシリアスでいいのかちょっとドキドキです。よければご感想など下さいませ（深々）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0659h/

うがたれたキズ

2010年10月14日14時06分発行